看護研究報告：

NICU における父性育成に向けた 援助と対児感情の変化

三ツ木愛美*, 角山智美*, 深谷悠子*, 小林美幸^{2*}

大野美津江

現在、育児環境が変化し父親の役割が重要視されている。NICUにおいても父親の愛着形成に向けて育児練習やカンガルーケアへの参加などを積極的に行なっている。しかし、NICUでは面会時間が限られているため、仕事をもつ父親は母親に比べ育児練習への参加が少ないのが現状である。今回、入院時から退院時までの父親の対児感情の変化を花沢の感情得点を用いて点数化することによって、入院中の児へのかかわりやケアへの参加の内容が、父性発達にどのような影響があるのかを明らかにすることを目的とした。その結果、全例で接近項目得点は増加しており、特に抱っこを行なうことで父親になったと実感した例が最も多く、父親実感を得る上で重要であったと考えられた。また、退院に近づくにつれて「こわい」「むずかしい」といった回避得点が増加した例もみられた。これは退院後の生活に不安を抱いた低出生体重児の父親にとって当然の感情であると思われる。

今後は個々の父親に合ったケアを取り入れ父親と児が心地よいと感じる環境を整えることが必要であると考えられた。

①父性 ②父親の実感 ③対児感情

I. はじめに

近年、育児環境の変化に伴い父親の役割が重要視されてきている。NICUでは父親の愛着形成に向け、カンガルーケアや育児練習参加などを実施している。しかし、父親のケアへの参加は生活環境や状況によって母親に比べ少ないのが現状である。そのため、より良い父性育成に向けNICUに入院となった児の父親の対児感情の変化を知り、父親と児の関わりやケアの内容が父性発達にどのような影響を与えているか明らかにすることで課題を見出し、今後の援助の充実を図る必要があると考え研究に取り組ん

だ。

II. 研究目的

父親の対児感情を知りケアが父性発達に与える影響を明らかにしケアに対する課題を見出す。

III. 研究対象および方法

対象：平成19年6月～8月に入院した低出生体重児の父親8名、A～H（ただし心疾患や重症仮死、奇形のある児の父親を除く）。

IV. 研究方法

入院1週間以内と退院決定後の2回、花沢¹⁾の対児感情得点を測定し変化を評価するものとした。2回のアンケートで初回のアンケートは

* 〒300-0053 茨城県土浦市真鍋新町11-7
土浦協同病院母子総合周産期センター NICU
(受付：2009年4月27日)

自由記載で児への現在の感情を記入した。退院決定後は児の入院期間・入院中の面会状況・行ったケアの内容・父親の実感について、自由記載欄には児への現在の感情と入院中印象に残ったこと、スタッフの対応について記入するものとした。

今回は対児感情評定尺度を用いて、14個の形容詞による接近項目と会費項目それぞれに“非常にその通り”を3点，“その通り”を2点，“少しその通り”を1点，“そんなことはない”を0点として得点をつけ、接近項目と回避項目との別に個人得点を求める。接近項目から求めたものを接近得点、回避項目から求めたものを回避得点とする。各得点ともに42点が最高点である。

V. 倫理的配慮

アンケート配布の際に両親に研究の目的と個人のプライバシーは保護されることを口頭で説明し同意を得た。

VI. 結果

入院期間はAが2か月以上3か月未満、B～

表1. 接近項目

あたたかい うれしい すがすがしい
いじらしい しろい ほほえましい
ういういしい あかるい あまい
たのしい みずみずしい やさしい
うつくしい すばらしい

表3. 入院時から退院時の対児感情の変化

父親 項目	接近項目		回避項目	
	入院時	退院時	入院時	退院時
A	27	27	8	13
B	20	27	9	0
C	27	32	5	2
D	23	27	3	3
E	27	35	6	4
F	20	31	5	9
G	37	41	4	5
H	37	39	3	4

Eは1か月以上2か月未満、F～Hは1か月未満である。面会は週に1～2日が6名、3～4日が2名で1日の平均面会時間は67.5分であった。接近項目は全ての症例で得点が増加した。父親実感について、「とても実感している」20.5%、「実感している」62.5%、「少し実感している」12.5%であった。そのきっかけは様々であるが抱っこが一番多く、ついで授乳、おむつ交換・タッチングであった。回避項目得点は4例が減少し、4例が増加していた。回避項目が増加した内容は「こわい」がもっとも多かった。入院後の児への気持ちには、B「保育器の中から早く出てきて欲しい、小さいけれど安心した」、E「NICUに入院が決まったときは不安に思った」などの回答があり、退院前では、B「無事に退院できて嬉しい。安心した」H「これから先、健康で元気に育ってほしい」などの回答があった。スタッフに対しては、NICUで作成している面会ノートについて「毎日来ることが出来ないので非常に良かった」という回答

表2. 回避項目

よわよわしい はずかしい くるしい
やかましい あつかましい むずかしい
てれくさい なれなれしい
めんどくさい こわい わずらわしい
みっともない じれったい うらめしい

表4. 入院中に父親がおこなったケア

父親 ケア	入院中に実施したケア					
	抱っこ	タッチング	カンガルークー	授乳	オムツ交換	沐浴
A	○	○	○	○	○	×
B	○	○	×	×	×	×
C	○	○	×	×	○	○
D	○	○	×	○	○	×
E	○	○	×	×	○	×
F	○	○	×	○	○	○
G	○	○	×	○	×	○
H	○	○	×	○	×	×

があった。

VII. 考 察

今回使用した花沢の対児感情の変化からすべての症例で接近項目得点の増加みられ、父親の児に対しての愛情や受容が反映されていると考えられる。また、全ての父親が抱っこをきっかけに父親になった実感を感じており、児の状態が安定していれば毎日行なえる抱っこは父親実感を得る上で重要な役割を果たしていると考えられる。また、面会ノートは、父親が会えない時間の児を知る手がかりとなったのではないかと考えられる。

ケアを行なっていく上で児への否定的な感情が減ると予想されたが、結果的に回避項目得点が増えていた症例があったことは、児への関わりの多少のみに関わらず、児の出生体重や児の経過によって父親の心境も異なり、退院前の不安を持った低出生体重児の父親にとって当然の感情であると思われる。齊藤²⁾は「男性は自分の個人的経験を通して父親役割を自覚し自分なりの仕方では父親役割をはたしていくことによって父親になっていく」と述べている。日頃仕事を持っている父親の多くは、NICUにて治療・療養をしている児と関わるができる時間が制限されることが多いと考えられる。

つい家族にケアへの参加や面会を求めがちに

なるが、父親の表現の仕方、ペースはそれぞれである。それを理解し、ケアの量や面会の頻度で愛着形成を計るのではなく、個々の父親に合ったケアを取り入れ、父親と児が心地よいと感じる環境を整えていくことが、愛着形成、父親育成につながっていくと考えられる。今回の調査では取り入れていないが、父性の発達は生活背景や父親の年齢の影響も大きいと考えられるため、関わった内容のみでは判断できない。そのため父親の状況を踏まえたサポートが必要であると考えられる。

VIII. ま と め

限られた面会時間の中で抱っこは父親実感を得られる重要な役割を果たしている。

また父親の愛着形成はケアに参加していく中で発達していくが、児の状態によって退院前の不安などの感情が増えることもある。そのことを踏まえて父性育成に向けて個々の父親に合わせたケアを取り入れ、父親と児が心地よいと感じる環境を整えていくことが必要である。

引 用 文 献

- 1) 花沢誠一．母性心理学，医学書院 1992；4：65—70.
- 2) 齊藤耕二．父親の辞典．平井信義ほか編著．東京：ぎょうせい，1977.

Fostering Fatherhood in NICU and Changes in Fathers' Feelings Toward Newborn Babies

Aimi MITSUGI*, Tomomi KAKUYAMA*, Yuko FUKAYA*,
Miyuki KOBAYASHI* and Mitsue ÔNO*

Along with changes in the child-rearing environment, the role that fathers are expected to play in child care has come to be regarded as more important today than ever. At our neonatal intensive care unit (NICU), we have a childcare course for fathers with the aim of bringing out paternal love in them and encourage them into doing kangaroo care. In actuality, however, many fathers, who are pressed with business, find it difficult to participate in the childcare program. This study was conducted to clarify the effects of the relationships between fathers and newborn babies in hospital and the paternal involvement in child care upon the development of fatherhood. For this purpose, the changes in fathers' feelings toward their babies during hospitalization were graded by the use of "emotion scores" developed by Hanazawa. The results showed that the score for "closeness" went up in all the subjects. The largest number of subjects were found to have feelings that they really became fathers especially when they took their child into their arms. This form of contact was though to be an important factor contributing to the awakening of fatherhood. As the day babies are scheduled to be discharged from the hospital was drawing near, it was found, not a small number of fathers were beginning to feel "uncertain" or "uneasy". This feelings could be taken for granted especially when their babies were born with low birth weight. We thought it necessary to develop a program tailored for fathers individually and prepare an environment where fathers and their babies feel comfortable.

*NICU, Perinatal Center, Tsuchiura Kyodo General Hospital, Ibaraki, Japan